

# 故郷



342 ◀◀

## 楠本 昌彦 (51)

白浜町出身

### 国立がん研究センター中央病院院長

「故郷への便り」の執筆を長らく担当してこられたお一人、竹中文良先生が昨年亡くなられた。竹中先生は外科医だったが、自らががん闘病をきっかけに後年はがん患者の心のケアに力を注がれた。

私が先生と面識を持つようになったのは、先生が第一線を退いて、がん患者の心のケアを行う団体「ジャパン・ウェルネス」を設立された後である。私自身もがんという病気を相手に仕事をしていることもあり、何かとお引き立てをいただいた。

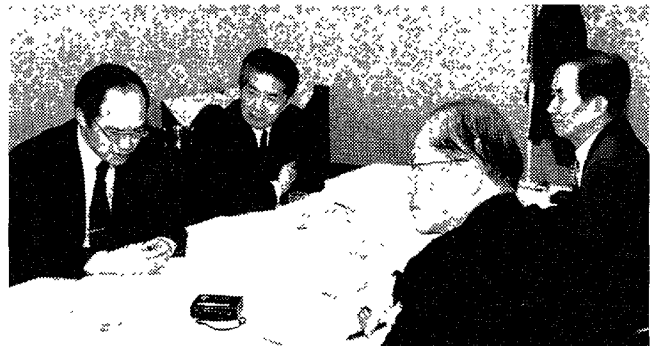
及んでいた。

お二人は、全く異なった運動を展開されていたように見えるが、かなり共通点がある、と私は思っている。ひとつは、ご自身の身近で起こった問題を見過ごさず、真にあるべき姿を考え、問題解決の方向に邁進(まいしん)していかれたことである。竹中先生の場合は、ご自身の大腸がんの手術がそれに当たり、外山先生はご自宅近くの天神崎の開発問題がそれに当たる。二つ目は、その方向性や手法には前例がなく独創的

## 竹中先生と外山先生

開発されそうになった昭和40年代の終わりごろから天神崎の自然を大切にする運動に奔走された。それは私が高中学生から高校生になるころで、父が外山先生と同じ学校に勤めていたこともあり、天神崎の運動のご苦労は身近なものとして聞き

で、時には私財を投げ打って行動されたことである。これも共通している。三つ目は、困難な過程をくぐり抜け、ひとつの展望が開けたころ、前例がないと思っていた運動には、実は同じような例が海外にもあり、同じような行動を起



竹中文良さん(右端)と座談会で話し合う筆者(左端)

れ以上に自分自身の考えているところにはまだまだ到達していない、という気持ちが強かったのではないだろうか。

だからこそ活動を最後までやり続けることができ、周囲からみると前人未踏のところにと到達しているのだが、当人にはその実感があまりなかったのではないだろうか、思うのである。

お二人のように、人のため次の世代のために、独創的な運動の先頭立って推進する偉人を生む風が、紀南の地にはあるのかもしれない。

協力 南紀人材交流センター